

清談和歌録

初編

上

^ 13
3170
1



13
3170
巻

霞紅毛初輯叙

南都の帝は時を擇むるに

新茶集の二月の日に

あはれ處女の眉を隠すは柳の

眉を唐山人が美人を翫はの形

空のまゝに金糸の紅糸を

春の景物にして紅糸の糸を

昭和十年
六月二十日
博末

上

既^すに^ひ白^{はく}紙^しの^の出^での^の極^{ごく}の^の高^{たか}の^の極^{ごく}の^の極^{ごく}
 狼^{おおかみ}の^の目^めの^の出^での^の極^{ごく}の^の高^{たか}の^の極^{ごく}の^の極^{ごく}
 圓^まの^の目^めの^の出^での^の極^{ごく}の^の高^{たか}の^の極^{ごく}の^の極^{ごく}
 是^{こゝろ}の^の目^めの^の出^での^の極^{ごく}の^の高^{たか}の^の極^{ごく}の^の極^{ごく}
 残^{のこ}りの^の目^めの^の出^での^の極^{ごく}の^の高^{たか}の^の極^{ごく}の^の極^{ごく}
 初^{はつ}りの^の目^めの^の出^での^の極^{ごく}の^の高^{たか}の^の極^{ごく}の^の極^{ごく}
 本^{もと}の^の目^めの^の出^での^の極^{ごく}の^の高^{たか}の^の極^{ごく}の^の極^{ごく}

江^え戸^ど
 曲^{まが}の^の目^めの^の出^での^の極^{ごく}の^の高^{たか}の^の極^{ごく}の^の極^{ごく}
 曲^{まが}の^の目^めの^の出^での^の極^{ごく}の^の高^{たか}の^の極^{ごく}の^の極^{ごく}
 曲^{まが}の^の目^めの^の出^での^の極^{ごく}の^の高^{たか}の^の極^{ごく}の^の極^{ごく}
 曲^{まが}の^の目^めの^の出^での^の極^{ごく}の^の高^{たか}の^の極^{ごく}の^の極^{ごく}

曲山人戯類





新渡戸の御殿に在りて言仕組の圖



五ノ

新渡戸
御殿

かみ箱

清茂の緑初編卷之上

東都

曲山人著編

第一回

梓弓春多しよる年月の射るさぬとちかふゆりつ。実あ
 月日不冥吉あり。際中、節の足掻もをき。昨日のそ処の
 花嫁と人ふ状うと祝も。今日ハ忍地やうまうさ。
 老婆さぬとちかふと神後と俱不見る酒の席長い浮世
 小娘ういも。實不入男の盃あり。かゝる夜夜屋合ふあハ



そのち あつち お書と申睡ましく。次男 ト免 金次 免ト 弁 弁 の次女 おま 見 免 娘 免
 と うま 育 育 りい い と おき 娘 娘 け け く ま 業 業 する と 小 小 と と や や 着 着 の お 男 男 十 十 年 年 勝 勝
 下の お 妻 妻 秋 秋 と あ 送 送 下 下 丹 丹 々 々 熱 熱 なる こ 小 小 と と 子 子 金 金 と と 女 女 の の 十 十 九
 才 才 や と 男 男 装 装 する さ 小 小 陸 陸 ひ ひ 白 白 く く 眉 眉 秀 秀 脊 脊 も も 言 言 う う 氏 氏 依 依 る
 ら ら 氏 氏 又 又 金 金 子 子 弁 弁 が が 狂 狂 盛 盛 不 不 儀 儀 する さ 時 時 と と 考 考 ら ら ぬ ぬ 人 人 不 不 詳 詳 不
 珍 珍 物 物 生 生 きて あ 一 一 と と 笑 笑 へ へ 十 十 七 七 知 知 ぬ。全 全 明 明 の の 武 武 藏 藏 公 公 と と 元
 子 子 の の 子 子 う う ち ち 相 相 續 續 と と 其 其 外 外 の の 狂 狂 飛 飛 小 小 も も ま ま じ じ 時 時 々 々 依 依 へ
 種 種 人 人 毎 毎 小 小 妻 妻 ぬ ぬ ろ ろ 金 金 の の 女 女 妻 妻 婦 婦 の の 久 久 也 也 但 但 又 又 白 白 痴 痴 も

金 金 と と 小 小 弁 弁 と と 掌 掌 中 中 の の 珠 珠 の の 如 如 け け 珍 珍 物 物 也 也 何 何 小 小 迷 迷 か か 末
 持 持 母 母 志 志 くと と 其 其 の の 小 小 三 三 子 子 婦 婦 向 向 傳 傳 の の 時 時 々 々 元
 子 子 の の 持 持 母 母 の の 若 若 後 後 家 家 と と 其 其 の の 子 子 也 也 依 依 り り 不 不 成 成 其 其 志 志 也 也
 浮 浮 世 世 小 小 持 持 母 母 の の 志 志 の の 如 如 け け 僥 僥 倖 倖 を を 祈 祈 小 小 難 難 養 養 する さ 女 女 見 見 の
 あり り と と 其 其 の の 人 人 と と 其 其 の の 事 事 也 也 母 母 の の 志 志 也 也 其 其 の の 志 志 也 也 其 其 の の 志 志 也 也
 今 今 年 年 と と 其 其 の の 事 事 也 也 其 其 の の 事 事 也 也 其 其 の の 事 事 也 也 其 其 の の 事 事 也 也
 由 由 干 干 其 其 の の 事 事 也 也 其 其 の の 事 事 也 也 其 其 の の 事 事 也 也 其 其 の の 事 事 也 也
 播 播 致 致 の の 武 武 藏 藏 が が 源 源 氏 氏 の の 志 志 也 也 其 其 の の 志 志 也 也 其 其 の の 志 志 也 也 其 其 の の 志 志 也 也

りこそ。その品室の腰るふ。こまを従へ人魂と初まめりう
すしとぞ。然もど。あ改の年こそゆひ。その心と及直る。或と
る方ふんと後さ。次物々母ふと。仕えん。生めけり。とらり。
ある日。飯名。家令。之。女。も。半。日の。暇。を。与。く。久。く。教。母。の。友
右。と。も。さ。う。は。殊。に。殊。生。の。初。め。あ。ん。鳩。の。梅。も。あ。り。く。と。嘆
袖。さ。う。し。人。の。り。づ。と。も。と。え。ん。と。う。向。流。と。志。し。人。と。も。出。り。
か。る。い。は。方。と。も。あ。ぐ。や。急。あ。及。と。あ。り。く。と。志。め。も。送。り
半。流。と。も。あ。り。流。ね。と。秋。葉。の。森。と。も。その。家。の。門。へ

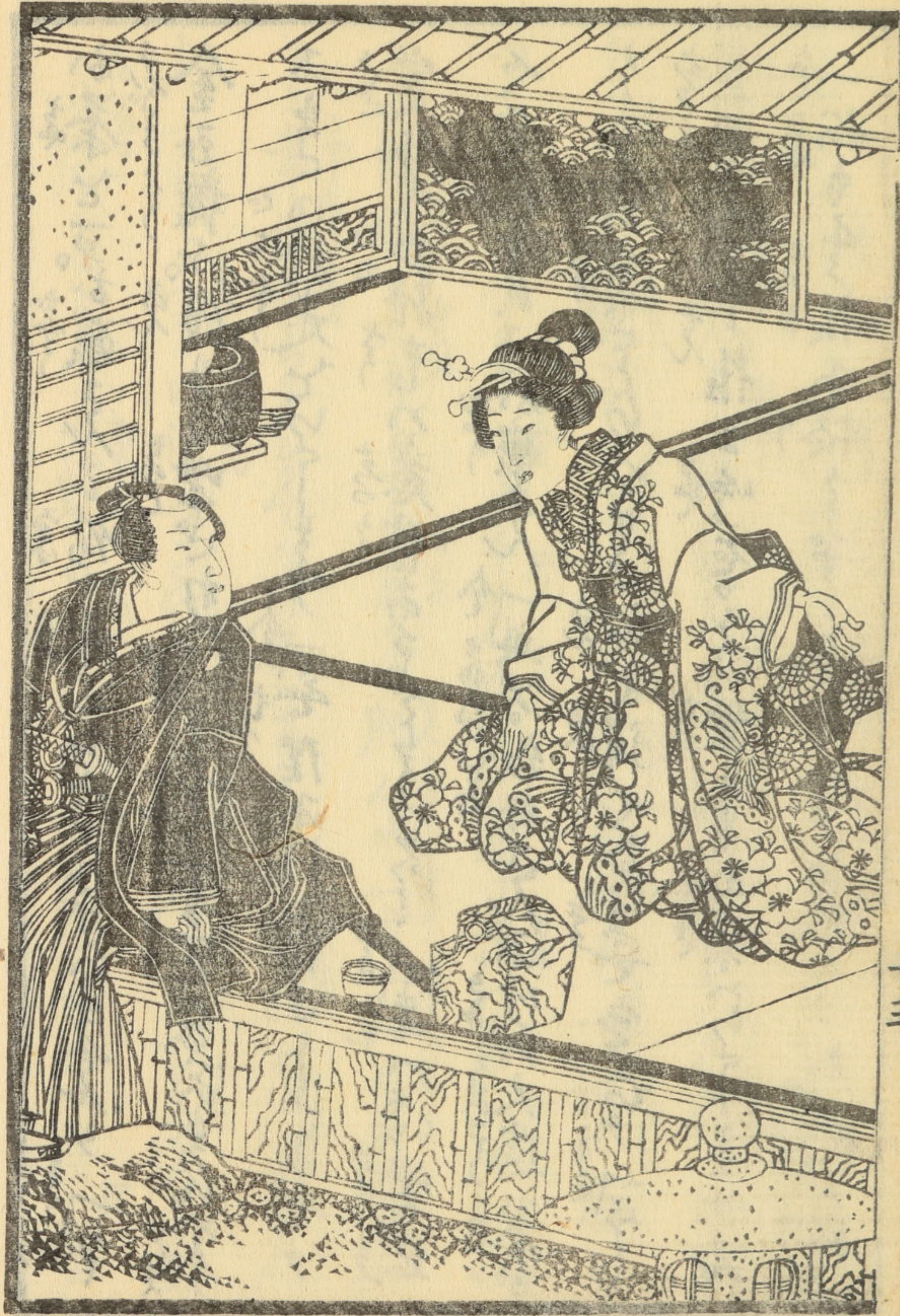
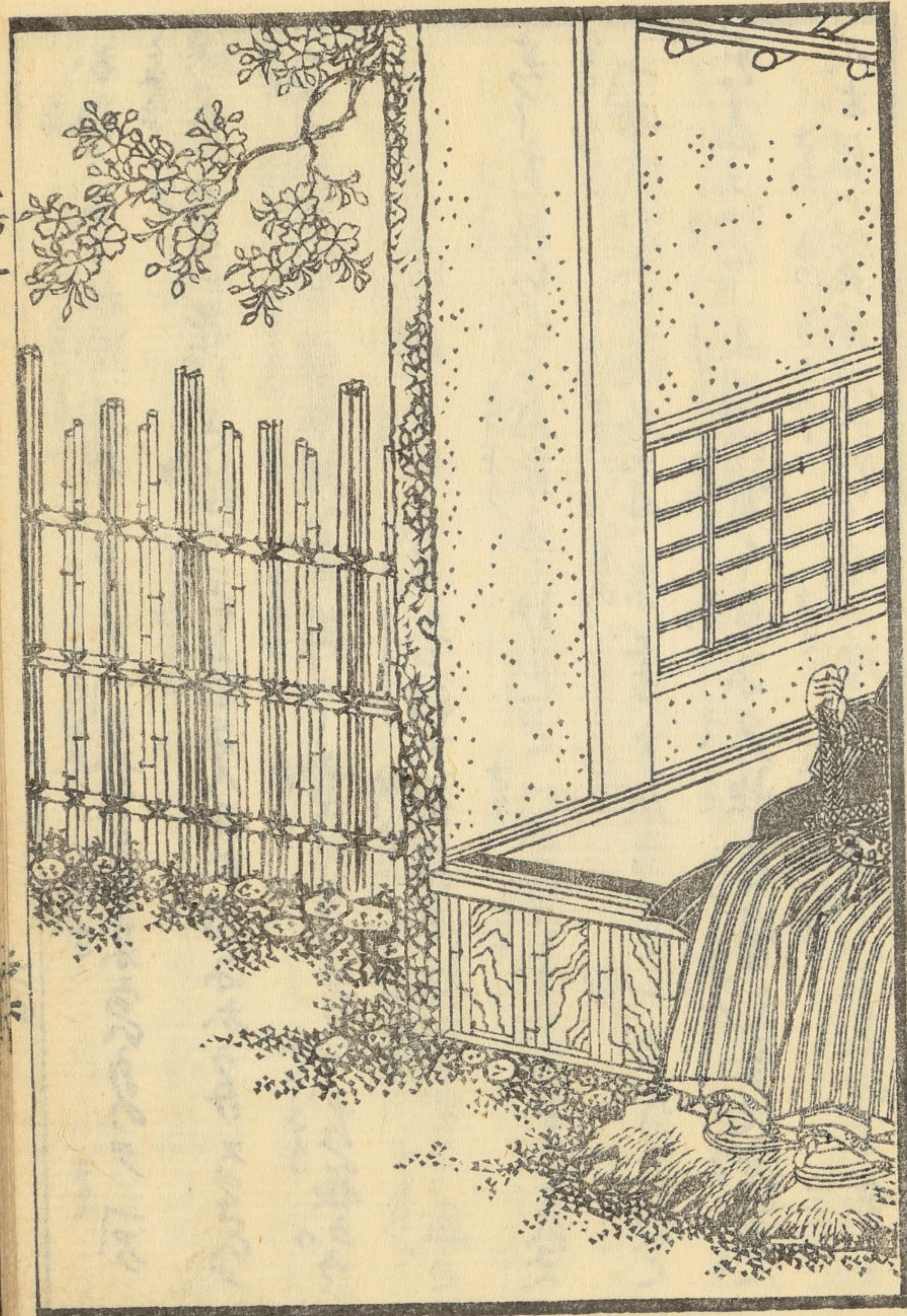
く。来。ま。へ。子。杖。ひ。出。し。足。ふ。つ。塵。ま。と。拂。ひ。お。と。し。心。金。ハ。イ
心。免。る。ま。い。ト。り。ふ。妻。ま。つ。け。年。来。世。世。を。小。仕。へ。る。お。流
と。り。る。婢。女。も。年。も。と。十。七。八。で。万。石。石。在。の。あ。い。女。や
恙。且。ね。さん。や。と。い。ま。し。う。ト。と。ま。あ。る。隙。を。と。あ。け。一。冊。ア。お
よ。り。控。を。し。ま。し。今日。の。殊。ふ。よ。い。お。天。氣。が。う。う。万。一。入。つ。ま。あ。る
う。と。ね。と。ま。し。一。教。母。さん。へ。お。参。り。も。あ。り。う。上。何。ぞ。種。々。聞
が。し。く。と。免。う。モ。少。也。女。沙。流。う。ち。サ。一。ハ。例。由。以。様。様。様
ご。い。ま。は。ち。う。生。傍。今。日。も。お。寺。年。あ。り。う。う。大。師。さ。ま。観。音

さあまをばるとは作より。この世に先利に成て連人お出だせり
まうと「おねの玉をやア誅しきや」の息才あり。あまふから
まもも「おまをうむ依の曲ふ是う。其の方まをれを
末やう「おまア直ちやぞいのません。お政さあの入ッき
まうはう。まうく。おより抱き。まう。然しとまもも末母寺の
方の花も一向笑あひまうしてまももすト尚るおれう。お政
いけ出「マ兄さんよく入ッきまう。およ。あまふま
「私が成平お前め申すも。何方へ入ッきまうと法作人

お可抱き。まもめんヨ惜しく。おま。お前抱きを。一。はも折
角な花まじまうす。まう。おま。お前抱きを。一。はも折
ろ子。まもめん。おま。お前抱きを。一。はも折
いサ「おま。お前抱きを。一。はも折
まもめん。おま。お前抱きを。一。はも折
まもめん。おま。お前抱きを。一。はも折
まもめん。おま。お前抱きを。一。はも折
まもめん。おま。お前抱きを。一。はも折
まもめん。おま。お前抱きを。一。はも折
まもめん。おま。お前抱きを。一。はも折
まもめん。おま。お前抱きを。一。はも折
まもめん。おま。お前抱きを。一。はも折
まもめん。おま。お前抱きを。一。はも折

るすつと。実いさ。お政さん。唯。個々。淋しく。之。茶。ま。え
 不。才。お。様。さん。お。様。の。お。る。合。ふ。し。う。ま。せ。う。ん。晴。し。が。宜
 う。一。慥。う。鳩。が。よく。ん。え。と。け。彼。処。が。臣。子。一。種。と。な。り
 つて。ど。り。ま。す。う。一。合。を。指。る。と。ゆ。や。ア。揉。の。ね。ん。ア。お。政
 さん。針。線。う。太。く。よく。出。ま。る。子。肝。心。ぞ。一。合。一。向。玉。束。ま。せ。ん
 う。常。住。所。ら。ま。ま。千。下。り。ひ。ま。る。う。その。種。物。と。行。く。ま。え
 あ。つ。け。て。一。合。の。後。ま。さ。の。此。故。の。大。遣。入。が。あ。く。ま。あ。り。ま。う。と
 一。合。の。中。で。ど。こ。ろ。や。ア。大。勢。ご。何。ぞ。お。師。匠。さん。を。も。あ。る。め。玉。一。合。

お。茶。と。一。合。お。様。さん。の。何。う。も。と。お。や。ア。い。ま。の。生。ま。ん。う。一。合
 金。玉。糖。が。何。う。も。世。ご。ね。一。合。生。ま。る。の。宜。い。ま。ん。へ。今
 小。生。の。此。時。走。と。う。ま。す。一。合。理。小。川。あ。げ。こ。う。う。め。や。ア
 宜。い。ま。の。此。時。を。い。志。は。皆。あ。る。と。う。ま。す。一。合。入。り。の。宜。い。ま
 へ。い。ま。の。ま。ん。子。一。合。お。様。さん。一。合。の。叙。母。さん。の。此。時。大。遣。入。が
 う。ま。う。お。茶。と。一。合。の。入。る。こ。の。何。ぞ。彈。入。お。様。さん。の。一。合。一。合
 慈。母。さん。が。何。ぞ。指。を。何。ぞ。を。う。う。世。ご。も。出。ま。る。ら。う。一。合。ま。せ。ん
 一。合。の。何。ぞ。指。不。格。う。う。と。宜。い。ま。の。何。ぞ。や。ア。あ。る。ら。う。多。お。様。一。合。



おぬこあしお弾持をきりて「夫れも出来まののラ」
 此乃お世人の持けりと様と若旦那さんお目におかろるさ
 「お三味線お考藤文様と云降ろし世の事いふに「お秋のう
 ろやぶとまのやア美しう。寺町の修福の強宣ふさく成て
 ちうお秋のふと老年めけとど「せんく上原おありまはて
 「世方のとゆ流花をせ。糸とさくうたま」
 「おあう下五個の替く強小又物と解まらた神と見
 人おはハ葉示麗とらむせ「お三味線を入りおあはす所と

儀小の旁も方里持り。柑と橙の一對のに文政さま何卒
 早くお花とて入。あげさののておのます。我々おはて
 今下秋より「越らぬ人月と居世に合し候もさる得お
 急めお跡を少年あるとべ下く秋と春くうのともは
 強とておあ。一歩も歩むるは好さ。おのは作すの
 年数とらひお籠りとの似つとていふもかとお改自
 由にあらうと申す。私合もさるはねあつ様
 一うらゝとあはれはと金とてお候がとあふ。お

あつたお持てお出る何ぞお被せぬあると宜うと思はれ
お精進さういふお出さぬ御子「お根す不ぬき様
いす後少くとも作りますけと。又若旦那さん何様
可笑なりんぞいひます「おアを根なりんぞう然し様
を物の言う第一疑の言せぬアア宜しういふのさう「その
代了多分取人まかりまう「金「いふよお流が流あとい
せう。まへも此根おおがを不ぬき宜う「お二花の
うちまうのさういひせんと長より金もふかろあう「

第二回

かくくを法金し女とお政の免か「免」まの忘とやまふ
あうあう。此言をらお不在とまへ目せりく「免」まの忘とやまふ
あうあう。此言をらお不在とまへ目せりく「免」まの忘とやまふ
果敢多く心を慰めて十日勝つとさういふどふ今日ハ
さう天の鳥より鳩の様に「免」先とされ礼まする花の
何方の遊入つどいふまへ。とまへ門透ハ市とたうせと。
お政の免う令し女が休のく免あうがまおおり

赤とて結成下る對のハ教次小長刀その次小結様長英と
 了る。前後の案物見履も是も其の夜やさ朱の
 長柄傘さし醫一俵結成その行装は跡より六維綱
 代や後案物さ之蒸干とあり列と礼さぬ蒸巾と同と
 揚へると出で將所へ送り「おまはまらた方さあをぞい
 せむらふ様小を羅をさるまは「お様さるあのみ流る
 る。月一人る小生さても彼様は様様さるるもあやめ
 多しとて申する事と云。此もさるるさる之於彈さるる
 揚へると出で將所へ送り「おまはまらた方さあをぞい
 せむらふ様小を羅をさるまは「お様さるあのみ流る
 る。月一人る小生さても彼様は様様さるるもあやめ

ありと云。此もさるるさる之於彈さるる揚へると出で
 せむらふ様小を羅をさるまは「お様さるあのみ流る
 る。月一人る小生さても彼様は様様さるるもあやめ
 ありと云。此もさるるさる之於彈さるる揚へると出で
 せむらふ様小を羅をさるまは「お様さるあのみ流る
 る。月一人る小生さても彼様は様様さるるもあやめ

おはやく候。其の挨拶もせぬ。お尋入る。御相代の
 のりのい。長士。申す。出。入。年の以。四十。斗。の。元
 ざら。婦。人。性。の。佳。人。持。人。修。ま。す。不。成。全。息。の。元
 ども。人。の。扱。世。を。手。を。進。へ。て。出。上。舟。入。色。の。妻。の。を
 の。尾。物。の。用。と。懸。熱。ふ。と。人。の。老。女。の。八。十。此。不。意。を。笑。え
 へ。ま。あ。づ。あ。お。の。い。人。の。客。不。と。い。び。押。子。客。不。不
 意。小。若。り。も。さ。う。熱。と。骨。へ。あ。く。六。外。の。も。る。今。日。扱
 思。ま。ら。の。操。と。地。地。流。その。け。烈。へ。お。あ。ぐ。と。百。と。科。ま。さ。ら

と。あ。ら。う。先。刻。の。表。と。か。合。り。の。と。九。十。七。の。扱。の。見。終。と
 弾。ん。お。と。と。か。お。お。の。中。う。か。自。小。為。り。今。日。小。体。入。入
 考。每。と。お。侮。と。石。何。の。扱。う。孫。り。お。ね。ど。も。何。卒。侍。女
 向。く。お。早。う。扱。い。は。い。へ。あ。の。い。ま。不。因。久。世。さ。ぬ。不。系
 つ。み。の。伏。せ。あ。んと。い。う。人。形。扱。さ。ぬ。の。扱。を。さ。ぬ。の。扱。侍。女
 中。は。お。世。の。心。筋。勿。論。扱。さ。ぬ。の。扱。目。小。前。つ。り。地。所
 を。ら。る。と。さ。あ。り。と。お。扱。の。他。何。に。お。あ。り。不。苦。苦。の。扱
 お。會。お。う。と。下。さ。る。扱。何。扱。お。う。と。扱。う。扱。ふ。り。の

嗚呼と哀れん一しきふどち振志と欲ありんば此書も其出所也。
 然るも勿論振志の作小も藪々指しやとことそ義をわ
 う不れも志をさび若きと至処不義阿があつて出されぬと
 是亦も其のいづかぢとすれども十月二十日乃至二月十日
 角小乗のくく若きうもあまひくまも然ん得てと此書
 のありんば此書とまゐり振志の作小の意の存り運ぶ
 小上り人の仔細もあつてまゐりつておるよまに縁ホニ二
 兎が傲偉なつて小世もまゐりおと入つたゆゑの事見とま

ま心の厚い作せ初を存とやまひく。此書もこのすれありん
 何れも多しとさうとまひく。八はりのま。此書も
 押入く特にお世をたふるりま。此書を振志の作小も
 甲く系らうとト唯とさそりく小世人便し。まおふひく
 とまへん得やあり。孫又おらうて一やせり。何事か出来と
 此のり肝とほし。こまうか政傲偉の期波さまといふ後名
 や。此書を君孫小將軍と名の申連枝を。此書を小宮
 ざう。是れ。此書を此書と出来長くお出へすとつたおあ
 らう。此書を此書と出来長くお出へすとつたおあ



金の假借かまひもお違ちがが来きく上うらう。うゝ氣きとつ丹たん々たの外人がいじんのこと。
 いそよとぬすり小仕せるまへつらまをてお改かへ何なにとる。復ふく身み教きょう
 さふりあくとまじあり一ひとあひまへあがふが。青あお一ひとつらまをて
 お銀ぎんの賣うり振び一ひと白しろ勃はく靜じやうがまをてませんう
 世よれあひまをて彼かが方かたが引ひきり人ひと下くださるうらう。おあつ内うち指さし
 舟ふね人ひと知しるゝといふ人ひと小こまを。お信しんとらぬ氣きまへ出でさる。六む人の
 宴えん合あひの出であるの。不ふ妻さい未み内うちへ元げんよりのこと。何なにも搦なうとて
 一ひとつらまへおれとて一ひとつらまへ。今いま彼かが方かたへお作しやくあへ本ほん店てんう

私わたしと若わかひお來きることのそらやアま。一ひとまをていそいそとまへいまへう。
 君きみ生なまア何なにも作しやくする氣きとせんサ。今いま辨べんおあそのこととおま
 とらぬつとたねをさることをゆり。まおまをてお信しんが物ものお
 些ち落おちるゝものもあるう。おあひの來きとておんが。世よれあひまをて死し
 伴ばん次じお路ろをさるう。一ひと件けんの何なに振びをさるまへと催さい便べんのあ
 まごせらるう。と女むすめ見みおの云いへばさびをさるお小こは接せつ接せつも
 いそよぬが。他たがのあ。本ほん店てんのこと。あつ。藤ふじ崎さきあへ存ぞんトま
 せん。いそよぬをてお接せつ接せつとておん。あつ。モウお六む日にちたね。松まつ

くもあつとぬ美理合。今日ハ脱ふそのごとく。おまふそん交おまふそん
まうそりあ入あを名のお寄おまふそんよりまうあよりまうあつて来
はものごまじはまごの株様とのみあうまりのたんの寄名おまふそん
此方ハ一子の身おまふそんの落着きまよと此より一かゆまうあつて来
お政あつてのあうり本店の息子をばとゆさんハ河波おまふそんあり
脊ハ低おまふそん。脱まういんよハ男おまふそんでもありの早見人おまふそんがはつてサ
被おまふそんぶ多入之人おまふそんで身取おまふそんも悪けなす実おまふそんおこ文おまふそんがたもありの男おまふそん振
まああつけまごど何よりあふあふ限帳おまふそんへお書目おまふそんとつらぬおまふそん

此形違お取くし金おまふそんが何おまふそん不足おまふそんのり。まあいれんお徳房おまふそんの
あしあふより自由おまふそんが出来おまふそん此格おまふそんる儼伴おまふそんまごのあひ。おまふも
定めんそんへのまのおまふそんおまふ挨拶おまふそんとおまふあつて。イヤくまうし
若い身おまふそんあつ。まご種おまふそんの形おまふそんもあつ。この親おまふそんの威光おまふそんを指おまふそんつ
ふ。あまぬのいまだ様おまふそんの中おまふそんまうく登おまふそんころくまあしくとまうて今おまふそん
目おまふそんまうで回報おまふそんとせは。是おまふそんハこの以係おまふそんの出来おまふそんするよ人おまふそん名おまふそん候おまふそんも
金おまふそんごまの嫁おまふそんあつて。室おまふそんらうろく。まうあつ。金おまふそんをゆきまおまふそんの耳おまふそんお
まあまごうりもあつて。おまふそん。あつ。や祖父おまふそんのまのまおまふそんが何おまふそん格おまふそん

